要馬秘極集 十二

和書門
類 一七二四六
號
函 一七四
架 九
冊 一四

内閣文庫
和書
類 一七二四六
號
冊 一四
函 五
架 四二

内閣文庫
番號 和 17246
冊數 14 (~~12~~13)
函號 154 409

武備兵

国立公文書館
National Archives of Japan

要馬秘極集巻之十二　藥方之巻　第四

益飼

芋のくき　三年

芋子　一年

大豆の粉　一年

茶　二年

大豆の粉　二年

小麦　一年

焼味噌　大竈

右細末して大豆の茶ゆ又常此通弼よ煮

せそそのめ年あらハ酒の糟一年稅一年入ら

一橋文庫

めしとりて米をもちて右の大豆の米こめうと
入りて煮てさ酒の中へ右の合米を
おこみうるまりて領へ一日に一本宛と入
七日程領へ其内大豆も米も共に領へ
何にる程せるうちた十日の内に拵かう
米は領汁出て入ひて味付けに移りの
白根成りて煮てけりたの合米を領
毎日やせ馬成大の内にうやまり秘伝の方へ
伝授よりやすり馬よりて結馬する

あるへし此性よりんを付へし

軍領

大豆　一本　ちいさき大豆をうりて粉かして
稗（ひえ）　一本　かハをさりけして日ほり
こぬか　一本　但併米のこぬかをうりくふうして少うりてひるぬかハ悪し
白米　一本　六合
大麦　一本　うくにきてけして日ほかと
餅米　一本　五合
芋のこさ　二本　細ほさき

大豆　二本ハ大豆と茶味を一ト入てよく煮
人參　二両　桃白皮　二両
威靈仙　三両　仙人草　二両
沉香　二両　胡麻　いのこつちの根　右分ニ細末して一本加へ用

右細末して二本ハ大豆ト五味の茶ハひとつゝ入大豆ハよくく煮ゆる程ハ煮て煮汁を大豆ハ煮りて大豆ハ切りて粉ハ為る右ハ茶味ト水を一本へ入れ煎じて煎じ合ト煎じ詰て色ハ黑く細末して粉へ

打ちめして日ハ切りをして用ル煎じ方ハ
茶味ハ拾四匁位右の茶味細末してひとつ
入合ちやうもう色と用ゆる馬精氣を增し
奈良甚不絶魂魄を安し口渴の氣を強し溫毒
冷の不合ハ進めず諸の毒を治し諸脫虛
して馬形をとゝのへ氣治し大中保成
通し仙成正ちゝ多無數の飼也年馬に
も時く獨ふりて飼へし中氣下所の
馬ハ切し用てよし軍場ハ也ハ成用れハ

大分は大豆銅を紙にあつ時銅女一周迄て馬
作る事一入なり此粥入所袋皮ゆて金袋
の板よりあつ方より結を付鞍乃後輪より付る也
又二つ有て毒の力華ゆも付る也

牽通数　結馬より用

牽牛子　一両　　牽朴　五分
茴香　五分　　椒柳子　五分
大黄　一両　　枳實　五分
芒硝　五分　　陳皮　五分

枳殼　五分　　續隨子　一両
青皮　五分　　耳草　二分

右細末して湯あるいは水にても用ゆ可

上結と見へハ　黄芩　黄連を加へ　青皮

陳皮を塩ゆ

下結と見へハ　桔梗根を加へ　大黄

枳殼　枳實を塩ゆ

虫結と見へハ　木香　莪朮　黄柳茄

馬焚出てハ　芒硝　枳殼を塩ゆ

を加へ　木香　槐仁　千姜を加へ
胃腑塞せし　石膏　芍藥を加
腹脹ハ　香附子を加　厚朴を場を

同銘強瀉

瀉通散　中品　芒硝　一文二分
牽牛子　中品　榆白皮　中品
莢柄　六分　正通丸　三粒

此丸薬ハいつれも斯方一服より三粒ヅヽ一度
より用丸薬ゆゑ丸薬ゆゑ面様ゆゑ用右ハ細

末して陽ゆゑ水ゆゑ用

浮通散とハ大腹ずゝ二度服をわけわけとして
て一度ハ紅花を一盃入一度ハ巴豆二十五六
粒入て二つを服通しあるゆゑ
ゆゑ夜ゆゑ水一夜ゆゑ
ゆゑ服通わかせて黒焼ゆゑ細末
ゆゑ丸薬ゆゑ巴豆毒とて
正通丸とハ　小麦の麩をもの円よりもてまぜ
くひろげ中へ水ゆゑ大ゆゑ沸ぶ狂入

ふせてよく乾かし用ゆ　白朮　白茯苓
むくらじ　猪牙皂角　生成
猪牙すくいのうち中にて黒猪牙を用ゆ
よりて水にてあらひ　桔梗　石の花
一分ハ用ひ　九蒸
三粒用ひ　車前子　浮通草　敗醬
牽牛子　黄芪　榆白皮
右ハ方ハ用て不適事ハ強く無ハ
後ハ多し軍場急用の秘法也

茵栖散

茵栖	五分	承紙ハ用	
木通	五分	滑石	五分
瞿麦	六分	車前子	五分
知母	五分	沢瀉	五分
茸草	一分	猪苓	五分

右細末して湯にても水にても用ゆ
寒とりんハ　茴香を加へ
熱ハ　瞿麦を增す

同鉛強通

黄柄　三匁　内一匁八生一匁八ツ蘆　一匁八ツ

草蘚　三匁　木通　二匁

白木　一匁　車前子　二匁

耳草　一分

右細末して湯少て水少ても用ひ

和虫散　出疝　結馬　尿結　合病ニ用ひ

良香　二分　黄柄　一匁

択売　二分　厚朴　二分

梔子　二分　茴香　二分

三稜　二分　耳草　一分

右細末して塩湯少て用ひ水少ても

馬疝ヲせハ　良香を去ル

結馬とハ　牽牛子　梔子を加ヘ二三服用

て加減ヲ可ハ　右ハ方を用ひ根本ハ

虫の本薬也

尿結とハ木通　草蘚を加ヘ用ひ

黄色ヨリ赤の抵ラ尿大ニ出ル

本方代用の也大黄を以て加減して右結
ゆゝ虫膨ハ寒熱たに付方ゝ
右病馬数多ありといへども結馬尿結虫膨
ハ三ツ当要心ハ道うんぐんして直ちに効ある
て其天下の名人と称る軍中之急
病二方代りて本馬と称ゝ紙
心を尽しゝ考へ有

延命丹

人参　一両　　あんせう　六分

龍脳　八分　　麝香　六分

小黒焼　一両　　塩硝　半匁

ゝ花　六分　　沢瀉　半両

右細末して蜜丸て稀る百病ゝ手練用ゆ
息痢也軍場ゆてせつき対ハ赤ゝ
ゝ書のゝゝ付ゝりのゝせつゝ
時ゝ馬ゝ也息代ゝも不知の故ゝ
ゝ

あんせ代ゝハ五月五日ゝ六月土用の内ゝ

四ようちくれ竹をこへ作の中へ入百日程置て
ゆあけうくあらひて竹を切割て丸まて中に
塩のやうなる物をまりてるもの成あり先て
ゆんせさと云竹の竹を治先て節後こめて入置也

白頭散　皆もり一切食茶

犬頭黒焼　五文　牛皮黒焼　六文
石灰　五文　羚羊角　六文
土竜黒焼　五文

右細末して一切いへ茶茶湯摺よりうけ茶湯

和て移りても付白也

鐵足膏　四足裏痛秘方

鮎腸黒焼　五文　鹿角黒焼　五文
女乃髪の黒焼　二文五分　水銀粉　二文五分
鉄のやすり粉　五文

右細末して猪の油にとりて古き松やに成
入てよくわりと合て所々時々茶に入移り合せ
加減ハ竹よ茶に置て丸薬の両方へうちまき
ぐ程和して丸中へ入れあくるなり也是乃裏

痛の秘方紙痛強くして一足ひくゝも不成
と云たゝ古き紙付きたゝく痛事のもまき薬
あるゝ角〳〵火あてあるゝめ裏一盃瓜へかく
所程ひろけ古き紙内ゟ付紙うち水乃
中へふゝこまれ角〳〵ゆるやかに時節あハ
うゝ風ゝ紙裏ゟ出さかゝ程あて焼ひろけて
付るゝ中年意ゝ馬後立てをゝ後家ゝ俗
門ゟ出ゝ歩るゝ軍場ゝ秘密ゝ
ゝ歩地

年貢馬ゝ巻 第五

平痍散

川骨 一両　石見川ゟ焼 一両
熟地黄 一文　百草 一両
鹿角ゟ焼 一両　川芎 一文
人参 半両　赤小豆 一両
茯苓 半両　牽牛子 半両
右細末して さゝげのうけ引 わう角さゝ水分
再して莫〳〵酒後大ゝ加へ用所ゝ急ゝ附ゝ

水ゆにても用ゆ

胴の内へ血をかくるげんそく　芍薬

きたんさう　各分ずつ加ル

首の内より手負痛ム　大黄　射干を加ル

頭の内より手負頭をさげ物ゝ不見是ハ不定よハ

たいそく根を加へ用ル也

まわう

又方　川骨二兩　鹿皮霜　白豆生　各五匁　見川骨各十匁　茅乃霜

右細末して酒ゆて可飼

一同方

鹿角焼　牽牛子　川骨　天南星

各ゝ分細末して常のごとく飼へし胴へ血ふくらバ

芍薬を黄しく飼へし

疵の血下の事

牽牛子　木香仁　ちんぴ　ちんぢゝく　白粉

右細末して水分牛膝を黄しを汁ゆて飼へし

永云枳殼を黄しても用ル

血通丸　手負ゝ結馬血下ニ用

人參　一両半　黄芩　一匁二分
大黄　一両　胡椒　五粒
芒硝　一匁二分　巴豆（皮を去り）　七粒
荆芥　一匁　紅花　六分
右細末して●芒硝より丸て五匁三十粒湯より
授薬をこくうちして用ひ多負馬繰（つまり）ある用
胴の内血滞りまり煩出る用ゆ承結（うけむすび）
草蘚　木通を黄しきせ汁出て可用
一　矢のあらうを薬の事

服よ矢あらうて腸出て所を入へ灸薬乃事
灵天蓋（きいてんがい）　童子の蟹（どうじのかに）　女髪（正焼）
右本分細末して芒を付て押入馬の尾ゆてぬい
て重へし　ゆやあざ　茶茶（おんこ）　茶茶　くこ
あぐらあざ　芒硝黄しきせ汁代ゆるくきて洗て
右の薬硝石のあらうを付へし
矢のとまりを紙ぬくへ灸
耳草　かうのあぐら　かうの栗
右本分よ押合て赤茶のそくいゆて口をとらふさ

右七日三度ヅヽ

苟菜散

鳥貝 黒焼　白菜　赤辛螺 黒焼　鹿角 黒焼

右水分細末して疳に加うるときは小児の涎

出て吐きて付へ〻 程久しき疳出たるときは蜆の汁

出て吐きて付ものも女の陰疳あへ沙参 掬合て

唇へ抑入ヅヽ

生命散

人参 一　一両　手負馬氣付　小黒焼　半両

蒲黄　一両　葛粉　半両

右細末して手負馬氣付ちい口是不自由

出て吐きまいらくなくなくて此薬成用ゆ寸蜜少て練

て也同前也

正留散

竜骨　一両　血留二方　蒲黄　一両焙て

虎皮 黒焼　一両　女松葉緑　一両

右細末して疳に用ゆ捻無ヅヽ強くふき出て蓬

ふきとるまでも付疳に抑付彩也

同断

猪牙（ゐのさゞ）　五八草　ホ分　右細末して一切

血留也　ちゝがいの耳ヶ三つ後馬の舌の上より血

疵洗薬

茨瘤（こぶ）　茨栢　ゆやあぐさ　枚の葉

吉ホ薬　車前草　各ホ分

右色紙黄して山汁ヶ疵洗薬を付る也

抜薬

ホ草一　うち栗　いぼ虫の巣（すゝ）　さゝうぐい

各ホ分　右細末して加うるの油ヶ練りて矢

の根留りうるゝ付ケどぎふゝ抜ゝ付きゝ

ぬくゝ毒也　猪の油ヶも練る也

疵付薬

鹿角　黒焼　一両　牛皮　黒焼　一両

土竜（もぐら）　黒焼　一両　牛角　黒焼　半両

赤辛螺　黒焼　一両　為頭　黒焼　一両

天南星　半両　炭天蓋（すみてんがい）　半両

右細末して胡麻の油ヶ練て付ケ茶疵（ちゃ）疵ヶ也

海さるハ　山のいもをけづりさきて茶を付
入角〳〵服腸出さるハ馬の尾をそらく
ぬいて仏茶代ハ付たまりみハ虎杖根をさきて
ふくハきものあぶらを少まぜて付る也服うけ代
もつとりと去て馬代ハ手をせゝ物やうにさしくなり
手負馬療治い物〳〵ものと人とも軍場ニ用る
ものゝ手負ハ時税角ゝ服薬をとく
角ゝ代を物〳〵茶あるく角〳〵ものハ茶等乃
用意ものゝ也

・四天定養散　去三ヶ月病ハ用
茯苓　梅干　黒豆　牛膝　各ホ分
耳草
右細末して一分ハ弐角を五箇ハ用る撰あるし
せてあるの水少て何〳〵寒ものゝ湯ハ酒代
加〳〵何〳〵去三ヶ月ハすゝ味代本味とすへ

同銘　去三ヶ月病ハ用
若辛　二分　茯苓　一両
菜白皮　一両　耳草　少

右細末して白さうの水又は漉酒にて用ゆ
夏三月は苦味代本味とすべし
あるべし

同銘　秋三ヶ月続病に用

白朮　干姜　神麹　各六分

耳草少

右細末して湯より酒代加へ用ゆべし甘草ぶき
乃水少して飲へし　秋三月は辛味代本味とすべし

同銘　冬三ヶ月続病より用

牽牛子　和大黄　菖蒲根　各六分

耳草少

右細末してくこの汁より酒代加へあるべし用ゆ
冬三月は苦味代本味とすべし
土用の内は耳味代本味とすべし
右山方は平附の打合未病財足分うるさく
四季ともに兎代用病證代うんづへ長代
方代飲へし

軍場懐中の方　第六

生延龍蛇散

万病ニ用

龍蛇　一両　　白朮　半両
桃白皮　一両　　茯苓　一両
村立　半両　　于鹿　一両
玉竹　一両　　良香　一両

龍蛇の皮骨奥ヨリ

右細末シテ麦粉五筒ニ何分ヲ万病ニ通
加味致シテ万病ニ用ユ又加味
何ハのかげん第一也但病馬ニ用ユ一袋入ル筒

用半袋入五筒ニ何分ヲ口傳

右加味之次第

挽木病ニハ　宋朝　黄芩　六分ヲ
加ヘ井戸の水ニテ用ユ何ニも煎ル常ニ
ヲ用テ何分ヲ
寒ニハ　干姜　良香　加ヘ湯ニ酒ヲ入
用ユ分ヲ
結馬ニ　芒硝
浮結馬ニハ　庭床　牽牛子　加ヘ湯ニテ用ユ
榆白皮　加ヘ湯ニテ用ユ

尿結ハ　草蘚
虫脱ハ　黄栢大
淋病ハ　沢瀉
肖反ハ　干姜
古肖古疵ハ　苟菜
糠疎ハ　遠志
ちくさハ　瘡砂
内羅ハ　良香
頭内羅ハ　欵冬花

瞿麦加へ湯ハて用ゆ
栝柳子中加へ塩湯ハて用ユ
草蘚加へ湯ハて用ゆ
黄蘗加へて右同前
當飯加へて右同前
悉冬加へて右同前
松緑加へて右同前
欵冬花加へ湯ハ酒と入用ゆ
實蒜加へ酒ハて用ゆ

三段くり内羅ハ仁厚子
諸眼病ハ　黄連
ハて用ゆ
大癰ハ　苟菜
て湯ハての屋油代丈加へ用
大風ハ　石凡川焼大　干漆中加へか移ハて用
陽風ハ　枯蔓根
多へ入まりくるやうてへ
息風ハ　石凡川焼　葛粉加へ溜ハて用

川芎加へて湯ハ酒とへて用ユ
胡麻加へぶくの汁ハ酒
山茱加へ松のみどりをすり

急風ヲハ　桔梗　甘草　加ヘ漬ル酒ヲまぜて
用ユ
早風ヲ　舟原　山慈姑　加ヘせてあさ水ヲ以て服
内風ヲハ　紫胡　白朮　加ヘすげの根まきい
ろろせんて用ユ馬ヲ水ぬけ走りくるしやまし
筋病ヲハ　柱心　毒脱味　加ヘ湯ヲ酒ヲ入用ユ
瘡ヲハ　没茶　白物ヲ加ヘ湯ヲて用ユ
折身打瘡ヲ草踏ヲハ　牛膝　大黄　加ヘ
湯ヲて用ユ

呵欠ヲし眠煩ヲハ　丁子　白朮　加ヘ
湯ヲて用
牛ヲ衝ル　竹木ヲて作ル　加ヘ
川骨　芍薬　加ヘ湯ヲて用
中風ヲハ　麻黄　毒脱味　加ヘ湯ヲ酒ヲ入用
桑息絶ヲハ　訶利勒　莉蘆　加ヘ水ヲ土ヲ
ぬて上ヲ煮ヲて用
腹中ヲ　串柳　併茶粉　加ヘそで煮て用
諸毒喰ヲ　五倍子　挽茶　加ヘ水ヲて用ユ

牙関ヱハ　芦毛馬脂　毒脫味
加へたる味噌ヱ酒ヱ入用ゆ
鼻血ヱハ　紫檀　串柿　加へ湯ヱて用ゆ
ちゝとひヱハ　干姜　栝蔞根　加へ水菜ヱて用
血尿ヱハ　苦辛　山巵子　加へひとりぢゝ
白指ヱより水ヱよりてて用ゆ
血煮ヱハ　麻實　白且　加へ湯ヱて用
かろせヱハ　麦麩　没茉　加へ湯ヱて用
たいらヱハ　川芎　桂心　加へ湯ヱて用

涕を吹延を流し煩ヱハ　白术　蔵霊仙
加へて湯ヱて用ゆ
蹉折ヱハ　牛膝　苟茉　加へ豆豉ヱて
ちゝ汁ヱて用ゆ
疥を痒ヱ嗜ハ沉香　生姜　加へまりたて用ゆ
則寒則冷ヱハ　肉桂　薏苡仁　加へ酒ヱて用ゆ
寸白ヱハ　干漆　村立　加へ湯ヱて用
穿換ヱハ　黄芩　辰砂　加へせあさ大水ヱて用
囚寒ヱハ　茴香　桂心　加へ酒ヱて用ゆ

腎虚ハ　兎絲子　芍薬　加へて湯に酒を入て用ひ

ちくようハ　枳殻　人參　加へ右同様

虚冷血ハ　黄蘗　續斷　加へ酒にて用ひ

寸白間へ下ひハ干漆　朝の骨　炒て粉にして

湯にて用ひ

頭風ハ　紫蘇　川芎　加へ心のいもをよく

すりて酒に入用ゐ又ハいもに絞せてその水にとりた

て用ひ

吐屎ハ　地黄　加へそうじの移　大酒に

塩を入水にて煎じて用ひ

吐血ハ　紫檀　人參　加へ湯にて用ひ

秋風ハ　干蛤　苦蒻　加へ加減して

用ひたてさきより血に出るへし

多負馬ハ　川骨　熟地黄　加へ小豆に煮て

そしゝて用ひ

あゞら目ハ　虎肉　黄連　加へ米の研に水に

のべて用ひ後の眼病にもあゞら目ハ板木を焼て

あくまきにけに　白物　ちやうの水分まして
ちやうくはりてあら月の方ぬ耳乃中へ入ぬ　花
きかくあハ　松緑　苔茶　加へ　遠志文大黄文
黄してあ乃小係を入用ひ
皮腫ハ　苔茶　地黄　桔梗根　加へ
水ハて用ひ乃ち成けゆ原ハ入へ
血揆大癰ハ　山茶　石見川ハ焼　加へ　松の緑
牛膝　黄しゆけまて用ひ
折身ハ　石見川ハ焼　桔梗根　加へ　湯ハて用ひ

息陽ハ　蓮肉　青皮　加へ　水ハ土を入うき
たてあう水ハ葛の粉を入用ひ
ひ孫ハさうハ　半夏　卵ハて七分黄て　紫蘇　加へ
山のいも成おろして湯ハうきて女あうめて用ひ
股及ハ　苔茶　干姜　加へ　松のみとり成黄
一用ひ乃ちうきまて水ハてひやハ入へ
角きかくあハ　苔亭　杏仁　加へ　南天竺の根干
姜文黄一せてあうき此水ハ湯成加へ手汁まて用ひ
内損ハ　串枡　縮砂　木香成黄湯成加へ

をけまて用ゆ

癲筋ハ　石見川大　訶利勒小　人參小　加へ

水茶まて用ゆ　日ニ度ひやとくしたる所ヲ水にてあらひ

ひやすへし

病馬見立之事

熱病ハ目の内赤く赤筋とり鼻ふきひらき極て息

早く毛身ヨリ付耳ヨリ汗ながれ　取り息大に

あらく成勝熱とす　鼻大ふきひらきなんあり

ヨリ汗を上實とす

寒病ハ目乃内青く涙ながし耳鼻すりて身の毛立

て間ちぐに馬形部ヨリ見ゆる也

牢熱ハ右の熱病ヨ似て似たれども肝の膽膽

の勝乃間三焦ヨ熱こりて水にてあらひひやせともあ

らあらに成云熱病のさめそこなひ牝ハ此證と為

因寒ハ右の寒病ヨ似て似たれども腎の膽膽脱

の間三焦ヨ寒こりて煩也寒病のあらはるる

此證と可知

結馬ハ如ある如くあらく息あらく間ちぐに皮肌細く

上實して耳の根にあせを膨り下乃毛立て然
中結ハあさあしわく腹張て長成るめ身成るを
ちり　下結ハ身成ず逆毛多あり毛立て腹張ちを
えざまて腹成ず尾を持て糞を出さるよりを
腹大ま張てあるとたり病ハ亜結と知へし馬死寒よ
見拙所ものを　腹ハあり中を以て尾をさし鼻を
間脹を息くるく口成あるよ水多を飲ハ死ら
す死　結馬急ものやをと以て腹ちるを尾をさすハ
拙死く可治

尿結ハ　腹成ひるくあり
をたら近ずておとのあて成ふめさや口
黄多あ死沈のるくよ人あ尿成ず生を史歯
をくへたあ口成あくあよあるを死ハ必死　尿結急よ
あやをと以て腹ちるを多ふひをるハ可治
溺結馬ハ右結馬のるく始と以て時く水の如ち
ち乳糞成ず出　腹ちり多成ず逆一息あるく
好地熱て穴よりを付人へ一を後糞るをり血
たさ出あ拙ずて然時くるて人あよ凝をもひろ

げ[illegible]ハ必死也

玉脉ハ脉代[illegible]ぎ背逆[illegible]て[illegible]分[illegible]

逆ー息[illegible]ー[illegible]て尾[illegible]馬死[illegible]に

見えハ治[illegible]

背反ハ背骨代下へ[illegible]て[illegible]く吾[illegible]息早く[illegible]

大腸の玉背へ[illegible]ハ[illegible]穴より白き物[illegible]出る死

早風ハ息早く[illegible]息[illegible]おこりの様[illegible]

[illegible]血[illegible]の[illegible]也

内羅ハ馬死[illegible]見えて吹間のてし一様[illegible]て

皮脉大ゟ動く也内羅ハ吹不出して前ゟ大ゟ鼻

を出ー後ハ頭の内ゟ[illegible]也内乱ハ吹て[illegible]ー不定ー[illegible]

あく〳〵吹時口を出近[illegible]て皮脉上りとも[illegible]爪女動

き上りの〳〵頭の内[illegible]息あく〳〵皮脉上[illegible]糠

草を踏ミ目ゟ[illegible]ゟ取[illegible]鼻息あく〳〵舌と唇

たまゟ[illegible]ハ必死　内羅[illegible]や[illegible]皮脉下ゟ鼻

の内[illegible]ぬゟ草代唇ハ[illegible]く可治

大風ハ俄ゟ背をゟめ歯ぐ[illegible]を出て耳の根に

汗出て死也

陽風ハ俄ニ振て間ちがみ目足腫毒色〳〵流れ
息ハたゝれるものも
息風ハ俄ニ息わるくなり馬糞癱て死ス
内風ハ息わるくなりあて早し耳の根ニ汗お
てゝ人所事ニ成ハ脾の臓の響ニ発生
泄瀉まくらし
急風ハ息ろくなやし血熱の死ス
ぐるぐるハ俄ニふるひて目ニ成一方ニて耳の根
ニ汗出て鼻ニ水流ス死ス小腸の冷ニ

ものうてをもうくく高色ニ成
たゝりひハ馬糞ニ門ニ毒ニ悪瘡出ひろゝ
ものうか事ニなりて馬甚わるく死ス
皮腫ハ毒身ニ梅或ハ粉ゝと行ニ同もおく脹
後ハ顔脹ル目脹ふさう大熱ニ死ス
ちりゝらへ脹来ひへしたる新蓑死ス
さくハ骨髄を痛ミ股ニ熱ハおくなてさいれ
ス成ル立ニ成ハ痛む方ニ目ニ成ル流して
居内也

諸毒喰ハ腹ゝ痛遍身ニ汗出て息早くはゝり
黄水を流し涕を吹物也
虚冷血ハ汗をとゝて身体がゆゝ色青して身
のもをすりぬる物也
腎虚ハ陰上ゝ毛ゝ抜ゝ出て腰ゝ下の光
の皮つゝ出ゝ
寸白ハ虫のゝ煩と云た尾を云次腹間の通
ゝてちゝ〻ゝ有ゝ腹内事ゝ有ゝ下間ゝハ寸白
間ゝ下ゝ間腹て煩ゝ寸白虫ゝ抜鼻ゝ黄色ゝ

水ゝ出ゝ流ゝハ必死馬乳搗ゝ出ゝ法ゝ飲ゝ治
ゝ
たいらハ頭ゝ有ゝ或ハ丸ゝ有ゝ草ゝ陳
ゝ
牙関ハ歯をくいしめ目の内ゝ白ゝ物ゝ
ちゝ〻ゝ不叶遍身乃筋ゝ引て皮ゝ
ゝ紙ゝ尾ゝ
事ゝ話也間ゝ是石腫自ゝ出ゝ
ハ乳ゝ

則寒則冷ハ牙関ニ似たり是ハ歯をくいしばり尾をさげ
て尻をふるはせさむかりて居る也
乗息絶ハ馬の息きれんとして息急にして則
汗出て大やむ也
中風ハ尻腰自由不叶必鳥頭の節かゞまりて遍
身の毛立て息早く口鼻ゆがみたまれ漏してハ
おくりの勝ハ次第ニ自由不叶也同じく是身の皮
はなれ舌を出し歯をくいしばり眼をみひらき尿の色
赤黒きハ必死

頭風ハかしらをさげ数をたてあるき足をよろ〳〵
とはかりしぬか草をも踈(うとく)む也
吐(ど)屎(し)ハ口より糞(ゑん)を吐き出す事也
秋風ハぬか草をうとくしてやうやう歯悪くぬけ
落なるもの也大切の物之養生油断なき事也
大きさ秋より入ものなるもの也
ひ秋のきうハ毛をまけ身にてちらすことくを
毛ぬけぬか草をうとみ大切の物也大きさ秋を
まえも此証ありされハさうしと云也

股及ハ常ヨリ堅固ナリテ俄ニ引ツレ曲ガリ
自然ト叶フヲ見ル人ハ中風ト知ル
諸瘡ハ法瘡ノ時ハ薬草ヲ給フヲ以テ
ヨクヨクハ治ス早ク悪瘡多ク治シテ後
又再發シテ死時内羅吹ノ薬草ヲ与ヘハ
必ラズ死
眼病ハ諸眼病乃時目乃論ヲヨク知テ治ス人見
ヲ大ニ知リ治シ
手負馬ハ疵ヲ洗ヒ痛マシ或ハ矢疵鑓疵

ヲ抜テモ必ズ死ル
吐血ハ口ヨリ血ヲ吐ク朝夕ヨクヨク見ル一度ニ
多クハヨクヨク血ノ色ヨクヨク赤キハ治シ
黄色ヨリ
古血ヨリ多ク出ルハ必死
壁ガクハ四足ヲヨリ頭ヲ下ゲ或ハ家ヲ
引ヲヨリ立ヲ
ひ即時ニ死ル川ノ流レハ馬ヲ
及ル所ヲ
内損ハ胃乃勝大腸ヲ

のど渇かつて水をあく事甚く頻く熱甚強くロをあく所にあらざれハ必死

癲筋ハ人乃癲癇乃如くにして俄に倒れ口吻を沸出し手足を強く死一時計にして息絶つ治方

馬よりして手馬より出ることいとへとも拾ふ

ありとあらゆる物ハ乱血と云ふ事なく見ること

氣血とも云

すくれハ手足ぶくれ五臓乃くるしく口吻

帰経して悪血を出して水とかつてかさあらざる節伝

龍草芝刀の通ふ所を押て乃ち拾の下強く

ねつとをとして大なるハ茎長さ五寸ばかり節を

をとして沢山なるを拾ふ節毎にわくとなる立ちあり

肖像びし内史うでくび皮肉の間腫少びの下ふくさ

をくるさ中和へ

龍馳くかすみ色びの如どの下に黄色或ハ茶色

ミクつき或ハ右の如乃筋ある色びを生ずるとき

汚ふ一和ひとして早天ふとりあげ行乃色ふ

うらと尾を切て拾ふ入焼へ

乃内日蔵茶碗

併茶の敵　うさぎ紙　村之　行きとお分

右三色の草紙蔵てそれへ地紙まげて至又至びら

上へけ至茶乃り

舟茶　きんさう　そこべ

茶分りて地の上よ至ふ紙らくまて敷ぬそうげ

又右六色乃草紙お分りて雪らりかそうけを包

茶そ紙藤ぬて敷うげ敷そ紙土ぬて紙ぬりて

黒焼ぬすうそ焼うう所土器の上ハこそげ敷て内乃

黒焼をもて新りて茶ぬ入所ぬ地紙敷地と

云ぬ黒焼ととと云

息命丹

莉芦	三両	生、黒焼香色	沈香	一両	龍脳	二分
縮砂	二分		人参	一両	訶利勒	一両
小黒焼	二両		香附子	二分	莪朮	二分
白朮	一両		苦楝皮	二分	生胞	三分
草撓	一分		木香	一分	薫陸	一分
安息香	一両		乳香	二分	梅干肉 水ニ漬塩ヲ出シ	一両

辰砂　二分　蘇香油　一両　耳草　一分

右細末して蜜にて練り合すべし食後奥に記

同方

小黒焼　五両　丁香　二分　訶利勒　一両

沉香　一両　丁子　二分　苦楝皮　二分

人参　一両　香附子　二分　草桂　一分

乳香　二分　白朮　二分　薫陸　一分

龍脳　一両　木香　一分　生脳　一両

安息香　二分　梅干肉　一両　茯木　二分

犀角　一分　辰砂　一分　茉莉戸　生黒焼香色　三両

縮砂　二分　塩硝　一分　石膏　一分

蘇香油　二分　石菖蒲　二分　耳草　一分

秘薬

右細末して蜜を湯煎して泡をとりて蜜の清を

ゆ取薬味代五六味ずつを練りて三日蒸て又清の

薬味代練りて三日蒸て清蜜の清をやはり薬味と

練りて一日一度蒸て清後何にても薬味ひとつずつ入

酒にて練り食すべし食後ごとに用ゆ

様ゆして七日をて之後万病不用防第一秘
密乃息相也二方を以調合乃時茶種成吟味すべき
事専要也小豆焼を以内八味五八草共て調合すべし
右此茶方古来より家傳之方也軍場急用を
達せんため加味之加減を以て万病を治しん之領状を
集て是を記す右龍馳之秘八諸の命を助を奈是秘伝
事の一上熱下熱をさまし胃之勝を凉し温を冷
之不食を進め内羅之瘧を切し動気を鎮め疫癘を
除き乱病を鎮め大小便を通し虫寸白を治して気を
勇心を正し萬病を用之命を守る口伝

要馬秘極集巻之十二

藥方之巻終

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan